

巨大商社・
鈴木商店が残したもの

1967年5月15日、神戸市中央区の市立中央体育館で開かれた神戸港開港100年の祝賀式。約5千人が埋め尽くす会場で、原口忠次郎神戸市長が、港湾功労者25人を顕彰した。実業家五代友厚らとともに、鈴木商店の番頭金子直吉の名があった。鈴木破綻から40年。金子が鬼籍に入って20年余が過ぎていた。

土佐(高知)出身の金子が鈴木商店に入つたのは1886(明治19)年、20歳のときだ。創業者の鈴木岩治郎は砂糖引取(輸入)商として業績を伸ばしたが、94(同27)年に急逝。妻の鈴木よねは女店主「お家さん」となり、番頭の金子と柳田富士松に経営を任せ、決断をした。

よねの信頼を意気に感じた金子。このときから希代の傑物といわれた本領を発揮する。

神戸港は1868年1月1日に開港した。外国人居留地では、今も街路に名が残るハンター、六甲山を開いたグルームら外国商人が活躍。新産業が生まれ、全国から続々と人が集まった。鈴木岩治郎もそんな一人だった。開港間もない74年（明治7）年、長崎で

菓子職人の修業の後、神戸・并天浜で砂糖問屋を開業した。数年後、薩摩（鹿児島）出身の川崎正蔵は川崎兵庫造船所（現川崎重工神戸工場）を開いた。明治半ば以降、紡績、マッチなど軽工業が栄え、神戸は横浜と並ぶ二大貿易港となる。

鐘淵紡績(旧カネボウ)が兵庫區に進出し、一大紡績会社に發展。総合商社・兼松の前身となる貿易商や、日本の代表的なマッチ会社清燐社が創業した。やがて、川崎造船所の後継社長として明治の元勲・松方正義の三男松方幸次郎がやってくる。後に金子と盟友と

なり、近代日本を神戸から動かす。

大戦景気で急成長

鈴木商店は日清戦争後、飛躍のチャンスをつかんだ。セルロイドの原料となる樟腦の一大産地台湾に目をつけた金子が、台湾総督府民政長官の後藤新平を説き、樟腦油販売権を獲得した。1960年に出版された「松方・金子物語」によると、川崎造船所の社長になる前に新聞社にいた松方幸次郎が社説「台湾の開発を論ず」を書き、それを読んだ金子が台湾進出を思いついたという。

その本の巻頭には鈴木商店ロンドン支店長を務め、後に日商（現双日）会長となった高畑誠一が序文を寄せている。「2人は神戸の生んだ偉大な事業家で氣宇も大であり、明治末期、大正時代に世界を股にかけて雄飛せんとし



㊤昭和初期ごろの京町筋の様子。左端が鈴木商店本店。その奥は横浜正金銀行（現神戸市立博物館）＝神戸市文書館提供 ㊦現在の京町筋。左の立体駐車場が鈴木商店の本店跡＝神戸市中央区海岸通（撮影・田中靖浩）

たことも一致する」

金子の事業欲はとどまるところを知らなかった。樟腦からセルロイドや人造絹糸の製造に乗りだす。さらに製糖、製鉄、造船へと拡大路線をひた走った。

第1次世界大戦時には伝説を生んだ。物資高騰を予測した金子が「まっ

神戸港開港150年

しぐらに前進じゃ」と、鉄や船舶、小麦などを一斉に買い占めた。予測は的中し、巨額の利益を得た。

大戦最中の17（大正6）年、三井、三菱の財閥を抜き、日本最大の商社に。売上高は国民総生産の10%に達した。「スエズ運河を通過する船舶の積み荷の1割を占めた」といわれ、名実ともに世界のスズキに成長した。

焼き打ち、破綻へ

絶頂期にあった18(同7)年、富山から飛び火した米騒動でコメの買い占め疑惑が広がり、本店が焼き打ちに遭う。後年、作家の城山三郎が焼き打ち事件を題材にした小説「鼠」で真相を追及した。買い占めは誤解だったと結論づけ、ようやく汚名が晴らされた。

経営の潮目が変わったのは第1次大戦後の反動不況だった。船舶や小麦の相場が暴落。巨額の借入金による拡大路線が裏目に出て資金繰りが悪化した。金融恐慌のあおりでメーバンクだった国策銀行の台湾銀行が融資をストップし、27(昭和2)年4月に破綻した。

日本最大の商社は幻と消えた。だが、日商を設立した高畑誠一や永井幸太郎、神戸製鋼所の生みの親といわれる田宮嘉右衛門、帝人社長の大屋晋三ら政財界に人材を輩出した。先駆的に取り組んだ事業の数々も今に残る。

「鈴木商店は日本が必要とする産業を育てた」。神戸大の加護野忠男名誉教授(68)はこうも指摘する。「金子は志で走った。だがブレイキを踏む者、つまり、そろばん勘定する人間がいなかったことが不幸だった」

金子を突き動かした志とは何だったのか。なぜ鈴木商店は急成長し、崩壊したのか。その答えを探ろうと、取材班は発祥の地・神戸を巡った。

敬称略

（村上百合）
（次回は10日掲載）

この連載は鈴木商店関係者の親睦会「辰巳会」に取材協力、一部写真の提供を受けています。

